

中国学分野シンポジウム

「文化的制度としての中国古典」へのおさそい

平田 昌司 京都大学文学研究科教授

古典 というとき、そこに示される意味は少なくともふたつありある。ひとつは、過去から伝承されてきた文献一般を広くさす言いかた。もうひとつは、ある地域の文化的規範としてはたらいてきた文献群である。

後者の意味で語られる 古典 とはなにか。あるひとつのこたばを窃むならば、「古典」とよばれる型は、文化規範と称される存在に似ているが、それそのものというわけでもない。また、伝承されてきた文献のテキストそのもの、あるいはテキスト内容の平均値でもない。しかし、古典は伝統として行為・制度・観念に深い影響を及ぼすと同時に、行為・制度・観念のすがたをとってその存在を実体化してきたものであった。とはいえ、古典とされるようになった書物は、最初から文化規範や伝統に近い存在として作られたわけではない。いずれかの時期に解釈を受けて選択され、文化的制度としての地位保障を得ることで、古典ははじめてかたちを定め、伝承され、利用されえたのである。

それならば、古典と呼ばれる制度はなぜ出現したのか、どのように機能してきたのか。古典学の「再」構築をはじめ以前に、そうした点を問い直してみてもよいかも知れない。二千五百年にわたって儒家の経書を古典の中心に据えつつ、文献の追加や再解釈を継続してきた中国は、観察の理想的な対象のひとつである。とりわけ、出土資料の急激な増加によって漢代までの文献が従来の予想を超えた多様性に富むことが知られるようになる一方、伝統的読書形態が大きく変容をとげつつある20世紀末の時点で、いちど古典の歴史をふりかえることの意味は大きい。こうした視点から、中国文学・文献学を主たる研究対象に、中国の第一線研究者を招聘したシンポジウム「制度としての中国古典」を企画するに至った。以下、ニューズレターの紙面をお借りして計画のあらましを紹介させていただくこととする。

主 題 文化的制度としての中国古典
日 時 2000年1月22日(土) 1月23日(日)
会 場 京都大学

主たる討議内容

古典の形成・古典の生産・古典の地域的拡散・前近代社会における古典の伝承・近代における古典の伝承・古典と権力・古典とジェンダー、などを予定。

中国からの招待発表者

()内は所属と専門

李 零(北京大学考古系。古文字学・古典文献学)
陳平原(北京大学中文系。中国現代文学・中国学術史)
呉承学(中山大学中文系。中国古典文学)
林梅村(北京大学考古系。中央アジア文献学)
葛兆光(清華大学中文系。中国思想史・古典文献学)
夏曉虹(北京大学中文系。中国古典文学・女性史)
王瓊玲(台湾中央研究院中国文哲研究所。中国戯曲史)

シンポジウムは、興膳宏氏(京都大学)による基調講演に続いて、「古典の形成」など各テーマごとの発表・討論を単位とする。具体的には、前半に中国側発表(中国語)20分間、日本側発表者によるその要約10分間をおき、後半に日本側発表(日本語)20分間、最後に通訳つきの討議10分間、合計で60分間となる。日中双方の完全な意思疎通あるいは中国学を専門としない参加者の理解に資するためには、すべての発言につき逐次通訳を入れていくべきかも知れないが、時間的制約から以上のような構成を考えた。そのかわり、シンポジウムまでに日中対訳の会議予稿集を作成して参加者のかたがたに配布、各小テーマの討論の後に15分程度の休憩時間をおくなどして個人的な質疑ができるよう配慮する計画である。もちろん、運営方法についてはまだ変更の余地があるので、ご意見をお寄せいただければ幸いである。

諸事情により1月下旬という忙しい時期にあたっているが、開かれるのはまだ1年以上さきのことである。ぜひご予定おくりあわせの上、ご参加いただきたい。

連絡先電子メールアドレス: shirata@bun.kyoto-u.ac.jp